考合すべし、凡て道口道尻と云も、其國を治に、京よりゆく路の次序につきて云名なり、

〔倭訓栞前編三十〕みちの玄り　道後也、凡そ國に後といふものは、皆かく訓せり、神宮雜例集に、員辨三重、朝明を道前三郡とし、神三郡を道後といへるも、此義也、古事記に道尻とみゆ、伊豫に地名道後あり、

〔古事記中應神〕爾建内宿禰大臣請大命者、天皇卽以髮長比賣賜于其御子、〇中略故被賜其孃子之後、太子歌曰、美知能斯理、古波陀袁登賣袁、迦微能碁登、岐許延斯迦杼母、阿比麻久良麻久、又歌曰、美知能斯理、古波陀袁登賣波、阿良蘇波受、泥斯久袁斯叙母、宇流波志美意母布、

〔古事記傳三十二〕美知能斯理は道之後なり、凡て道前道後の事は、黑田宮段傳廿一葉のに云り、此の道後は、日向國を指て詔へるなり、其は京より下る道の次第に因て、筑紫の國々は北なるを前とし、南なるを後として、筑前筑後、豐前豐後、肥前肥後、皆然り、日向大隅薩摩は、筑紫の南極なるが故なり、又は諸縣郡を指て詔へりとも云べし、此郡は日向國の南の極なり、和名抄に擧たる、彼國の郡の次第も、北より初まりて南に終れり、又伊勢國にて度會多氣飯野三郡を神三郡と云、又云道後と、神宮雜例集と云物に云る、是も彼三郡は、彼國の南極にて、京より下る道後なれば、なり、されど此はなほ廣く日向國とするぞまさるべき、萬葉十一七に、路後深津島山とあるは、備後を云り、又十七に、美知乃奈加とあるは、越中なり、

〔古事記傳二十〕道奥、〇略中奥は口に對云稱にて、道口道後の後に同じ、京より行に、初の地を道口と云、終を後とも奥とも云り、此國は東北の極に在て、實に道の奥なり、筑紫にても、大隅薩摩を奥の國と云ること、檜垣家集に見ゆ、又陸奥國にても、黑川郡より北を奥郡と云、大同五年の官符に見えたり、源氏物語若菜卷には、播摩國内にて、此國の奥郡と云ることあり、

〔倭名類聚抄十道路〕大路　唐韻云、道路音露、毛詩有遵大路篇、南北曰阡、音千、日本紀私記云多知之乃美知、東西曰陌、音百、日本紀私記云與古之乃美知、四聲字苑云、路阡陌總名也、

〔大戴禮記十三易本命〕凡地東西爲緯、南北爲經、

〔日本書紀七成務〕五年九月、令諸國以國郡立造長、〇中略隨阡陌以定邑里、因以東西爲日縱、南北爲日横、

大路　中路　小路